

## 複合コミュニケーションとしてのエネルギー療法

的場 主真<sup>1</sup>

### 抄 録

本論文の目的は、エネルギー療法としての岡田式浄化療法 (Okada Purifying Therapy: OPT) が複合コミュニケーション活動であることを理論的に説明し、さらに、OPT 施術能力の開発に必要な霊性向上 (統合的意識拡張) が、広義のコミュニケーション能力の開発と関連していることを検討することである。

本論文では、エネルギー療法としてのOPTを統合的コミュニケーションモデルの枠組み内で考察することにより、「社会的感化コミュニケーション」、「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」、「直接コミュニケーション」の複合コミュニケーションとして捉え直すことが可能であることが判明した。また、それぞれのコミュニケーションの機能である「非局在情報への同調」、「生体エネルギー放射」、「傾聴」がOPT 施術においても必須条件であり、これらの条件を能力として捉え発達させることが、施術力を高めることにつながることを確認した。

### キーワード

エネルギー療法、岡田式浄化療法 (OPT)、統合理論、コミュニケーション、社会感化コミュニケーション、非言語ホリスティック心身コミュニケーション、直接コミュニケーション、非局在情報、傾聴

### 1. 研究の背景

岡田式浄化療法 (以下、OPT) は一般にエネルギー療法として分類されており、「療法士の掌から宇宙や大自然に遍満するエネルギーを放出して「生体エネルギー」の流れやバランスを整えたり、「霊体 (spiritual body) の曇り」に働きかけることで、自然治癒力を高めて健康を増進する」<sup>1)</sup>と定義されている。物理的には、施術者の身体から被施術者の身体へ放射されるエネルギー作用であり、心理的には、施術者の意志想念の及ぼす治癒作用である、と見做すことができる。

これまで多くの研究でOPTの医学的効果が報告されているが<sup>2)</sup>、この療法並びにエネルギー療法の本質的なメカニズムを解明した研究は皆無である。

OPT 施術者は特定の知識・能力を備えていなければならないが、知識は「岡田式浄化療法テキスト」等で修得できるが、能力、特に霊性向上は各施術者の日常生活と施術の実践において積み重ねつつ習得されなければならない。今後の研究においては、以下の課題に答えていかなければならない。

- (1) OPTの施術効果を高めるための霊性向上とは、どのようなものか
- (2) OPTと霊性向上との間にどのような関連性があるのか
- (3) エネルギー療法としてのOPTがなぜ施術効果をもたらすのか

(1) に関して、ホイザーと的場は、岡田式健康法における霊性向上に必要な項目をウィルバー統合理論における4象限 (「私」、「私たち」、「それ」、「それら」)

<sup>1</sup> ドイツ連邦軍大学人間科学学部

〒D-85577 ドイツ国ノイビーベルク市ヴェルナー・ハイゼンベルク通り39

連絡先:

的場主真. TEL: (+49) 2302-1797509,

E-mail: kazuma.matoba@unibw.de

受付日: 2016年7月25日, 受理日: 2016年11月5日.

に分類して考察すると、「自己意識」、「自他関係」、「自然宇宙観」、「人間と環境（不可視の世界も含む）のシステム観」を進化させる（開発する）ことが霊性の向上であることが明らかになった。さらに、同論文では霊性向上を「統合的意識拡張」と定義している<sup>3)</sup>。

（2）に関して、OPTの施術効果と「統合的意識拡張」との関連性を研究することは、物理現象としてのエネルギーと、心理現象としての施術者の心理的状态との関連性を研究することに他ならない。OPT施術者はどのような心理的状态にあるのか、どのような意識活動が行われているのかは、脳波や近赤外分光法を用いたヒトの脳活動の実験によって解明されるであろう。

（3）に関して、OPTを施術中のエネルギー放射としてのみ研究観察の対象とするのではなく、施術者と被施術者の間でやり取りされるすべての相互行為を全体的に観察する必要がある。なぜならば、施術前の準備段階での施術者の意識状態や両者の会話と、施術後のケアの会話が、被施術者の健康状態に何らかの影響を与えている可能性は非常に大きいからである。

ここで使用している意識という概念は、「私たちが、夢を見ない眠りから覚めて、再び夢のない眠りに戻るまでの間持っている心的な性質」<sup>4)</sup>のことで、心的思考活動の状態を意味する。我々の思考は意識にのぼる思考と、のぼらない思考とがあり、前者は思考過程が発話や内言を伴う「表層意識」での思考であり、後者は発話や内言を伴わず、ユングの集団的無意識に相当する。集団的無意識は認知科学ではまだその存在を証明されていないが、前者の意識にのぼる構文論的構造をもつ思考は、脳の中ではなく、発話という形で環境の中で行われるといわれている。つまり、心は脳を越え出て、身体を通じて環境にまで及び、身体や環境がなければ、心（思考）は完全な形では成り立たない、ということが出来る<sup>5)</sup>。ゆえに、我々の思考・意識にとって身体と環境はなくてはならないものであり、個人は全体（環境）との関連において思考・意識することが可能になるのである。

本論文では、以上の3つの研究課題を究明するための基本的枠組みとして、エネルギー療法としてのOPTを広義のコミュニケーション活動としてとらえ、さら

にOPTに不可欠の霊性向上（「統合的意識拡張」）とはコミュニケーション能力の開発と深く関わっていることを理論的に提示した上で、今後のOPT研究の新しい方向性を探る。

## 2. コミュニケーション再考

我々は、日常生活において常にコミュニケーションを行い、生活そのものがコミュニケーションであるともいえる。対人コミュニケーションは知覚、感情、思考の伝達を目的としているが、具体的には意思の疎通が行われ、心や気持ちが通い合い、相互理解が可能となり、初めてコミュニケーションが成立する。コミュニケーションは送信者と受信者間の情報伝達だけではなく、情動的な共感、さらには受信者への心理的身体的な影響をも含む。いずれにしろコミュニケーションにおいては情報が重要な意味を持っている。

クロード・シャノンが1949年に提唱した情報理論では、情報量、エントロピー量を数学的に定義し、その後の情報通信技術に非常に大きな貢献を果たした。しかし、コミュニケーションとは何かという本質的な問いかけには、情報の数量的研究を中心とする情報理論だけでは解答することができず、質的価値についての研究に重点を置くコミュニケーション学において、数多くのコミュニケーション理論が提案されてきた。しかし、情報の本質については未だに解明されておらず、情報は物質でもエネルギーでもないという考えが定着しているものの、それでは非物質、非エネルギーの情報とは何なのか、という質問には明確な解答がなされていない。

本章では、ウィルバーの統合理論<sup>6)</sup>をもとに、コミュニケーションの様々な側面を明確に定義し、統合的コミュニケーションモデルを提唱し、さらにコミュニケーションの拡大分類により、エネルギー療法を下位分類に含むコミュニケーション理論の構築を目指す。

### 2-1 コミュニケーションの三側面

ホイザー・的場では、人智学医学とOPTにおける霊性向上の概念を研究するにあたり、比較考察のための枠組みとしてウィルバーの統合理論と象限モデルを

使用した。

ウィルバーの統合理論の中核を成す象限モデルによれば、世界には互いに還元できない視点が少なくとも4つあり（主観的、間主観的、客観的、間客観的）、我々は現実世界の様々な状況や問題を本質的に理解しようと試みるときには、それらすべてを考慮に入れなければならない。ここで言う象限とは、あらゆる事物は2つの根本的な区別を通して観察することができるという単純な認識を表したものであり、この区別は、（1）内面（主観）と外面（客観）の視点、および、（2）個的（単数）と集散的（複数）の視点、である。これら2種類の区別から生じる4つの象限はまた、現実世界に関する領域を表しており、4つの基本的な代名詞「私」「私たち」「それ」「それら」によって表現される。これらの代名詞は、象限モデルにおける各領域のうちの1つを表している。これらの4象限において、人間の身体（それ）、精神（私）、自他関係（私たち）、システム（それら）を詳細に記述することができる。また、各象限においては、それぞれ異なるコミュニケーションが執り行われており、人間の身体とのコミュニケーション、自己の精神とのコミュニケーション、自他間におけるコミュニケーション、人間と環境の間のシステムにおけるコミュニケーションに大別することができる。

人間のコミュニケーションは大別して

- 自己コミュニケーション  
intrapersonal communication
- 対人コミュニケーション  
interpersonal communication
- システム・コミュニケーション<sup>†1</sup>  
systemic communication

に分類される。自己コミュニケーションとはさらに、客観的自己コミュニケーションと主観的自己コミュニケーションに下位分類され、前者は自己の生理的肉体内または小宇宙の肉体内に内在する大宇宙の構成要素とのコミュニケーション、後者

は自己精神とのコミュニケーションを意味する。対人コミュニケーションは狭義の意味での人間間のコミュニケーション活動であり、コミュニケーション学並びに言語学の研究対象である。システム・コミュニケーションとは、人間を取り巻く環境における様々なシステムとのコミュニケーションであり、専ら無意識に行われる活動である。これら3種類のコミュニケーションは、ウィルバー統合理論の象限モデルに対応している。すなわち、自己コミュニケーションは「私」（第1象限）と私の内部の「それ」（第3象限）とのコミュニケーション、対人コミュニケーションは「私たち」（第2象限）のコミュニケーションであり、システム・コミュニケーションは「それら」（第4象限）とのコミュニケーションである<sup>3)</sup>。

コミュニケーションの3つの側面は、単独で存在、機能するものではなく、実際の日常でのコミュニケーションにおいてはすべてが同時に進行しているが、対人コミュニケーションが我々の意識を独占的に占めており、自己コミュニケーションとシステム・コミュニケーションを意識することは稀である。例えば、夫婦が口論をしている場合、口論そのものは対人コミュニケーションの内容であり、送信者と受信者の間で双方に不愉快な情報が伝達され、何らかの感情が分かち合われ、両者の行動に何らかの影響が及び、極端な場合は妻あるいは夫が家を出て行くという結果に終わる。口論のコミュニケーションにおいては、送信者も受信者もそれぞれの自己の身体の緊張や心拍数、呼吸頻度等を経験することになり、無意識にこれらの身体の変化とコミュニケーションを行っている。また、この口論が行われている環境システム、例えば、居間、庭、電車の中、車の中、子供の面前等、を気にしながら（意識しながら）コミュニケーションしているが、この意識活動そのものもコミュニケーションである。このように、自己、対人、システム・コミュニケーションは常に同時に行われている。

## 2-2 統合的コミュニケーションモデル

上述したようにシャノンのコミュニケーション理論<sup>7)</sup>

<sup>†1</sup>文献3では、トランスパーソナルコミュニケーションに相当

では、エントロピーと確実性・不確実性の度合いを数量的にモデル化し、送信者が情報をコード化してメッセージとして伝達し、受信者がコードを解読し情報を理解するという直線的コミュニケーションモデルを提案する。この情報量はビット (bit) という単位で計測されることになる。情報は物質でもエネルギーでもない宇宙を構成する第三の要素として考えられ、現在に至ってもその実体を明確に定義できていない。しかし、この理論が発表される3年前には、デニス・ガボールが情報理論と量子物理学を組み合わせ、情報をエネルギーとして捉え、ログオン (logon) という新しい単位で数式化できる可能性を報告しているが<sup>8)</sup>、現在に至るまで脚光を浴びていない。最近では、グラウらはインターネットに接続した脳波図とロボット制御の経頭蓋磁気刺激法 (TMS) を用い、複数の人間の脳の間で、言語を使用することなく、情報が交換されていることを発見し、その情報を測定することに成功している<sup>9)</sup>。

情報とは物質やエネルギーと並んで、宇宙における根源的な概念ととらえることができる。情報を効率的に処理するコンピュータなどの機械が出現したのは前世紀だが、情報そのものは太初の間から存在している。物質やエネルギーの存在はビッグバンによる宇宙生成まで遡るが、情報が誕生したのは地球上に生命が出現した約38億年前のことである。西垣によると、情報とは生命体の内部に形成されるものであり<sup>10)</sup>、さらに情報は「機械情報」、「生命情報」、「社会情報」の三つのレベルに分類される<sup>11)</sup>。「機械情報」とは情報工学・情報科学における情報であり、意味が捨象されているのが特徴である。「生命情報」は生命体により認知、観察される情報である。「社会情報」とは、人間社会において多様なメディアを介して流通する情報のことで、言語や映像などの意味作用を伴う情報である。

しかしながらあらゆる情報は、基本的に生命体による認知や観察と結びついた「生命情報 (life information)」なのである<sup>12)</sup>。つまり、狭義の社会的コミュニケーション (本論文では、対人コミュニケーション) も、心身内部の心理的・神経的・生体化学的コミュニケーション (本論文では、自己コミュニケーション) も、システム間のコミュニケーション (本論文では、システム・

コミュニケーション) も、帰する所すべて「生命情報」を伝達し共有する行為である。

本論文では、これらコミュニケーションの三側面を、従来の直線的コミュニケーションモデルに統合し、情報を「生命情報」と捉え、この情報が伝達されるだけでなく、共有されることも考慮した統合的コミュニケーションモデルを提案する。このモデルは図1のように図式化される。

• 自己コミュニケーション：送信者側 (緑の枠内)

- ① 送信者は、ある情報を受信者に送信したいという意志を持っている。
- ② その情報は神経・筋肉プロセスを経て、具体的に各身体機能を動かす筋肉に伝えられ、発声、模倣、ジェスチャー等のコミュニケーション行為が行われる。
- ③ この神経・筋肉プロセスを経ず、神経・心理プロセスを通じて直接この情報が受信者に伝達されることもある。(以心伝心、祈り、テレパシー等)

• システム・コミュニケーション (青の枠内)

- ① 送信者も受信者もそれぞれが存在する環境 (システム) を意識することも、意識しないこともある。ここで言うシステムには、五感で知覚できる明示的システムと、知覚できない暗示的システムとがある。前者には送信者と受信者の間の距離、空間、人間関係、血縁関係、組織、建築物、土地、地域、国、環境等が挙げられる。後者には太陽系、銀河系、宇宙、時間、エネルギー、あるいは縁が挙げられる。いずれにしても、コミュニケーションにおいてこれらのシステムと意識的・無意識的にコミュニケーションを行っている。
- ② 送信者も受信者も、推理・考察などによるのではなく、勘などを働かせて物事を感覚的にとらえることがあるが、これは一般に「直感」と呼ばれる。さらに、直接的に全体および本質を捉える認識能力は「感性的知覚」あるいは「直観」と呼ばれている。例えば、母親が乳児の欲求を感覚的に理解 (直感) したりする。また、予約した飛行機に搭乗する気がせ

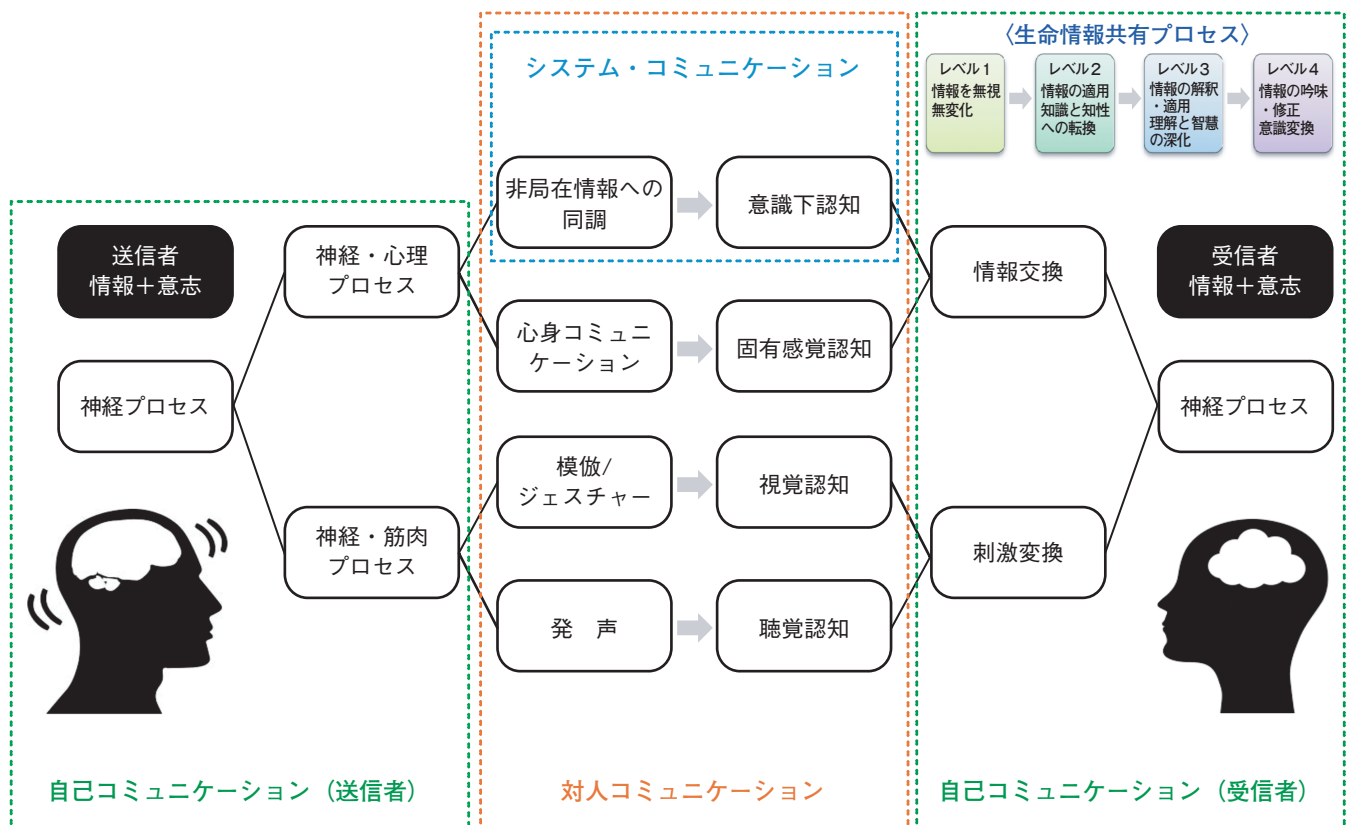


図1 統合的コミュニケーションモデル

ずキャンセルしたところ、その飛行機が墜落したことを後で知りぞっとしたりするような経験では、日常的には「靈感」が働いたというが、これは哲学的には「直観」の働きである。このような直感と直観をここでは、「非局在情報との同調」と呼ぶが、後に詳細する。

• 対人コミュニケーション（赤の枠内）

- ① 送信者からの情報は言語コミュニケーションか、非言語コミュニケーションによって伝達される。受信者はこの情報を理解したいという意志を多かれ少なかれ有する。
- ② この情報は受信者側の聴覚器官と視覚器官で刺激として認知され、神経プロセスを経て刺激が情報に変換される。
- ③ 聴覚・視覚認知以外に固有感覚認知（身体に対する意識の知覚）で刺激を受信し情報に変換することもある。例えば、人相の悪い見知らぬ男性から声をかけられ鳥肌がたった時

の、肌の反応に対する認知能力が固有感覚認知である。あるいは、これらの認知プロセスを経ずして、直感で受信者からの情報を知覚することもある。この知覚は意識下に行われる。

- 自己コミュニケーション：受信者側（緑の枠内）  
以上のように、送信者側の「非局在情報への同調」、「心身コミュニケーション」、「模倣、ジェスチャー」、「発声」により伝達される情報や刺激は、受信者の認知プロセス（「意識下認知」、「固有感覚認知」、「視覚認知」、「聴覚認知」）を経て適当な信号に変換される。このように送信者からの情報は伝達され、変換され、さらに共有される。ペイトソンはこのプロセスを「情報共有プロセス」と名付け、受信者側に注目し、以下の4つのレベルを区別する<sup>13)</sup>。これらのレベルは、図1の右上に「生命情報共有プロセス」として表現されている。

レベル1：受信者は伝達情報を無視し、何らの変化も起きない。

レベル2：受信者は伝達情報を適用し、情報が知識・知性に転換される。

レベル3：受信者は伝達情報を解釈し創造的に適用し、理解・智慧が深化する。

レベル4：受信者は伝達情報を吟味し創造的に修正し、自らの意識や習慣に何らかの変換が起きる。

送信者が伝達した情報は、それが受信者にどのように受容されるかにより、様々な反応を喚起する。この喚起は受信者の受容態度だけに依存するのではなく、情報を含むメッセージの質や量等の要因にも左右され、言語学では研究が進んでいる。しかしながら、その他の重要な要因である送信者の意志力、あるいは情報そのものの力（エネルギー）に関する研究は皆無である。

## 2-3 コミュニケーション再分類

2-2ではコミュニケーションの対象である情報に注目し、コミュニケーションの三側面を区別し、さらにそれぞれの側面において、送信者と受信者との間での生命情報共有プロセスがどのような過程を経るかを簡単に記述した。2-3ではコミュニケーションにおける生命情報共有プロセスが、どのような媒体を通して行われるかを簡略に説明する。

一般にコミュニケーションは言語媒体を使用するかしないかにより、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションに大別される。前者は言語だけでなく、手話、モース信号等の暗号、コンピュータ言語をも含む。後者は言語以外の手段によるコミュニケーションで、日常生活において、我々は複数の非言語的手段を意識的にも、無意識的にも使用し、メッセージを伝達している。従来の狭義のコミュニケーション論では、非言語コミュニケーションの手段として顔の表情・顔色、視線、身振り、手振り、姿勢、距離、服装、髪型、呼吸、匂い、声質等が研究されている。2-3では、上記の統合的コミュニケーションモデルの中心的概念でもある「生命情報共有プロセス」という観点から、

コミュニケーションの再分類を試みる。なお、言語コミュニケーションに関する説明は割愛し、以上に列記したような、これまで十分研究されてきた非言語コミュニケーションの説明も省略する。

### 2-3-1 社会的感化コミュニケーション (Socio-affective dialogue)

コミュニケーションがどのように人間の感情、思考、行動に影響を与えるかは心理言語学、社会心理学、神経言語学において多くの研究成果が達成されているが、コミュニケーションが生物個体に直接及ぼす影響については、音響音声学以外ではあまり研究されておらず、さらに、人間の生理的個体発達に及ぼす影響についてはほとんど研究されていない。しかし、ブラッドリーは、母親の新生児に対する話しかけ行動に注目し、この母親のコミュニケーション活動が新生児並びに乳幼児の脳の発達に大きな影響を与えていることを証明する<sup>14)</sup>。これまでの発達心理学や言語習得研究においては、大人が話す言語を乳幼児が聴覚認知し、模倣を通して一語発話から段階を経て複雑な統語構造を習得していき、その結果、認知能力が発達するという認知学習理論が主流であったが、この研究では、母親あるいは父親の発話そのものが直接子供の脳構造の発達に影響を与えるとする仮説は衝撃的であると同時に、言語並びにコミュニケーションの本質を究明する手がかりを提示する可能性を秘めている。

土居では、母子間の視線コミュニケーションにおける母親及び乳児の脳機能活動を脳波を指標に分析し、その結果、母親では、我が子の視線情報を観察中に、視線方向による自動的注意定位反応を反映すると考えられる事象関連電位成分EDAN振幅が増大することが明らかになり、乳児を対象とした脳波周波数分析の結果からは、前頭部 $\alpha$ 波パワーの側性化パターンを指標として、乳児の視線情報に対する敏感性を定量化できる可能性が示唆された<sup>15)</sup>。この研究は言語並びに非言語コミュニケーションにおいて、視線コミュニケーションの重要な役割が解明されることを示唆している。

このように「社会感化コミュニケーション (Socio-affective dialogue)」(ブラッドリー) とは、受信者側の脳構造や脳波に変化を及ぼすコミュニケーション

であり、言語コミュニケーションと非言語（視線）コミュニケーションが他の生命体に与える物理的変化の研究は、子供の発達研究（発達心理学、言語発達研究）だけではなく、臨床心理学や健康心理学においても貢献するところが大きい。

### 2-3-2 非言語ホリスティック心身コミュニケーション (Nonverbal holistic psychosomatic communication)

ベドリッチらは、相補医療で実施されているスピリチュアルヒーリングは、ヒーラーがエネルギーをチャネリングし被施術者に放射し健康を保持するというパターンソンの定義<sup>16)</sup>を継承し、生体エネルギーを用いる療法を総括して「非言語ホリスティック心身コミュニケーション (Nonverbal holistic psychosomatic communication)」と分類している<sup>17)</sup>。しかしながら、この論文ではエネルギー療法がなぜコミュニケーションに属するのかという理由には触れていないが、サアドとデ・メデイロスでは、生体エネルギーは生物コミュニケーションの重要な言語であり、ここでは生命情報が細胞間で伝達される<sup>18)</sup>、と述べている。

非言語ホリスティック心身コミュニケーションには、施術者が手で被施術者の身体に触る「身体接触コミュニケーション (ハンドオン)」と、施術者が被施術者の病患部に手をかざすだけの「非身体接触コミュニケーション (ハンドオフ)」とがある。前者には外気功、オステオパシー、指圧、ポラリティセラピー、セラピューティック・タッチ等があり、後者は一般に手かざしと呼ばれる伝統的民間治療で、Johrei、REIKI、OPT等が挙げられる。これらの療法は、一般にエネルギー療法と分類され<sup>1)</sup>、またオッシマンでは、エネルギー療法に電気療法、磁気療法、ホメオパシー療法も加えて、エネルギー療法と総称し、その機能と効果の科学的な理論化と実証化に努めている<sup>19)</sup>。

エネルギー療法におけるエネルギーは存在が科学的に証明されているものと、証明されていないものがある。伝統医学や信仰療法で取り扱われている生体エネルギーには、これまで科学のメスが入らなかったが、現段階では測定が困難であるが、その存在そのものは否定されていない。この点は、コミュニケーションに

おけるエネルギーが非常に微弱であり計測が非常に困難であることと似ている。また、エネルギー療法のエネルギーとコミュニケーションにおけるエネルギーは、何らかの生命情報を含むという点でも共通している。

OPTでは、まず施術者が被施術者の健康状態について質問し、後者がそれに答える。この相互行為は対人コミュニケーションであるが、施術者はこの相互行為から得た情報を、これまでの施術経験と、テキストや施術資格講習会で修得した客観的知識に基づいて施術計画を立てる。この行為は自己コミュニケーションである。さらに、施術中に視覚認知や聴覚認知、または意識下認知、固有感覚認知を通して被施術者の反応を観察し、施術に必要な情報として処理し、施術計画を訂正したりする。この行為も自己コミュニケーションである。施術者から放射される生体エネルギーが被施術者の身体に何らかの影響を与えていることは、多くの研究により明らかにされているが<sup>2)</sup>、この施術における相互作用は、対人コミュニケーションでも、自己コミュニケーションでもない、別種のコミュニケーションである。なぜならば、施術者は身体力を抜くこと、施術を通して自分が相手を癒すという慢心を取り払うことが要求されるが、これは施術者と被施術者と生体エネルギー源間のエネルギーの流れをスムーズにするためであり、これら三者のシステム間の交流であり、システム・コミュニケーションと考えることができる。これについて岡田茂吉は、「人間力を抜く」<sup>20)</sup>ことが重要であって、そのためには慢心しないことであり、謙虚であることである、と述べている。謙虚さを欠くと、傲慢になり、自分が特別だと思い、自分の目的を達成するために他人を利用し、過剰な賞賛を求め、他人の気持ちを理解できなくなる。同様のことは臨床心理学においても論じられていることであり、一般的に、慢心をしないことは、心理療法士にとって非常に重要な心がけである。

### 2-3-3 直接コミュニケーション (Direct communication)

大脳生理学において人間の脳と脳の間での直接相互行為の研究を始めたのはデュアンとビーレンツ<sup>21)</sup>であり、その後、様々な研究が行われてきた。ターゲットとパットホフはEEGを用いた実験で、被験者が感覚器

官を使用することなく他の被験者と情報を交換することが可能であることを明確に指摘している<sup>22)</sup>。オーム・ジョンソンらは、瞑想により安定した脳波が放出されている被験者グループから離れたところに存在する他の被験者グループの脳波は、前者グループから何らかの影響を受け、脳波が変化することが確認されている<sup>23)</sup>。グリーンバーク・ジルババウム<sup>24)</sup>やワレス<sup>25)</sup>でも瞑想が自己のみならず他人の脳のコヒーレンスにも影響を与えることを実証している。グリーンバーク・ジルババウム<sup>26)</sup>では精神分析者とその患者の間での相互行為において両者の人間関係が深まるにつれ、両者の脳波が似た変化を示すことを実証しており、このように、感覚機能を通さず相手の存在を感じる相互行為を「直接コミュニケーション (direct communication)」と名付けている。この直接コミュニケーションが確立されているコミュニケーション間においては、安定した脳波の状態が相互に影響を及ぼすことが、様々な研究者により証明されてきている。

直接コミュニケーションをさらに発展させ、送信者の存在を感知することなく、一方的に送信者が受信者に非言語的にコミュニケーションする治療法は「祈り療法」と呼ばれる。祈りは宗教行為と見做されがちだが、実際は人間誰もが行う意志想念の行為である。生得的な行為ではなく、経験的に家庭環境や教育環境の中で習得する行為である。祈りの行為の対象は自己か他者であるが、神や人間を超越した存在を介在するのが特徴である。すなわち、第三者 (超越者) に自己や他者の願望の成就を依頼する行為である。

祈りが健康に及ぼす研究は、ここ数年アメリカを中心に増加しており、コーニッゲ<sup>27)</sup>は300以上の心理学、神経科学、医学研究データーをレビューし、祈りが人間の健康に好影響を与えることを肯定している。祈りを療法として最初に医学的に研究したのはハリスら<sup>28)</sup>で、彼らは入院中の虚血性疾患患者を、祈りを受けるグループ (466人) と受けない対照グループ (524人) に無作為に分類し、前者のグループの患者には、ボランティアの祈りチームを割り当てた。祈りチームは患者の「合併症が併発せず、早い回復」を28日間、毎日祈り続けた。祈りチームに知らせられたのは患者のファーストネームのみで、患者の診断や病状に関する

情報は一切与えられていない。患者本人には研究が実施されていることは知らされていなかった。入院後に発生した新たなイベント (診断、合併症、医療行為) を、その重症度合い (死亡6点から抗生剤使用を1点まで) でスコア付けした合計点は、対照グループが平均7.13点だったのに対し、祈りグループでは6.35点と10%の改善が見られたという。

「直接コミュニケーション」や「祈り療法」に共通するコミュニケーター、あるいは療術師の能力は、相手への感情移入 (エンパシー) と相手を想う気持ちであり、これらの能力を促進するためには高度の傾聴能力が必要である。ここで言う傾聴能力とは、単に相手の話 (言語コミュニケーション) を真剣に聴くことだけではなく、相手の表情、行動、顔色等の非言語コミュニケーションにも注意を向け、相手からのあらゆる信号に注意を払うことである。

### 3. 三種類のコミュニケーションの複合体としてのOPT

OPTにおいては、施術者と被施術者間において、以上の「社会的感化コミュニケーション」と「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」と「直接コミュニケーション」が同時に行われていると考えることができる。すなわち、施術前の言語コミュニケーション (質疑応答会話) は、被施術者の健康状態に焦点が当てられ、施術者は被施術者に対して、共感 (エンパシー) を抱き、症状改善、健康改善、健康維持に貢献したいと思う気持ちを高めることが重要である。このような施術者の心的態度は直接的に被施術者の気持ちを和らげるだけでなく、上記の「社会的感化コミュニケーション」で詳細したように、被施術者の脳に何らかの好影響を与えることが推定される。

言語コミュニケーションによる質疑応答の後、OPTが行われるが、これは言語を介さない生体エネルギーによるコミュニケーションであり、「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」と見做すことができる。

施術中は言語コミュニケーション活動が極力回避され、また、静かな環境において施術が行われることか

ら、施術者の脳波が安定しており、さらに被施術者の脳波にも影響を及ぼしている「直接コミュニケーション」の状態が維持されていることが推定される。

このようにOPTは三種類のコミュニケーションから成り立っており、それぞれが機能を果たし、総合的に被施術者の健康改善に好影響を与えていると考えられる。さて、この機能とはどのようなものであろうか。まず、「社会的感化コミュニケーション」における機能とは、施術者が被施術者に言語コミュニケーションを通して「同調する」ことである。同調とは物理学では、ある固有の周波数で振動する物質が、他の物質の周波数に共鳴することを意味し、無線工学では、電気回路などで作られた信号に対して他の回路が共振などによって追従する状態を意味している。コミュニケーションにおける同調とは、この物理学と無線工学の定義から類推して、コミュニケーションにおいて複数者間の脳波リズムが同調することと定義できる<sup>29)</sup>。

次に、「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」の機能とは、被施術者に対して生体エネルギーを手から放射することである。人間の手からは赤外線が放射されていることは最近の研究で明らかになっているが、どのようなメカニズムが働いているのかは、今後の研究を待たなければならない。

最後に、「直接コミュニケーション」の機能とは、施術者の安定した脳波が被施術者の脳波に何らかの影響を与えることである。

以上の三種類のコミュニケーションの機能に関して、それぞれ、奥<sup>30)</sup>、オッシマン<sup>19)</sup>、ズーメインとコジマ<sup>31)</sup>の説を以下に詳細する。

### 3-1 非局在情報への同調

奥は、スピリチュアリティを「宇宙全体に遍在する、プラスのエネルギーを有する情報のレベル」、情報を「非局在情報」として定義している<sup>32)</sup>。「非局在情報」とは、オランダ人物理学者のゲラルド・トフットが提案した「ホログラフィック宇宙原理」において用いられている概念で、物理学者のガボールが発明したホログラムの理論を応用したものである。ホログラムの特徴は、平面の中に立体の情報があり、部分が全体の情報を持っていることである。ホログラフィッ

ク宇宙理論は、宇宙空間全部の情報が一枚のホログラムとして記録されているというものである。

奥によると、宇宙は、三次元の空間に時間を加えた四次元時空であり、この全部の情報が三次元境界面にホログラムとして記録されていると推定できるが、理論的には解明されていない<sup>33)</sup>。さらに奥は、この三次元境界ホログラムに人間の意識の中の情報がすべてコード化されて記録されており、意識はこの三次元境界ホログラムに関わっていることを仮説化している<sup>34)</sup>。このように「非局在情報とは、意識の根源であり」<sup>34)</sup>、非局在情報から分離してある特定の場所と時間に存在する情報は、人間の意識として脳を通して活動するということができる。

奥では、さらに心身医学やスピリチュアル・ヒーリングの根底にある理論仮説として「意識の医学」理論の構築化を試みている。

非局在情報とのコヒーレンスから意識の情報が伝えられます。そうすると、意識の状態が変化して、スピリチュアルな意識レベルの健康になるのです。心身医学やサイコセラピー（心理療法）では、意識情報から生命エネルギーへの変化が起こって、さらに物質身体への変換が起こります<sup>35)</sup>。

具体的には、この意識情報のエネルギーで、脳細胞内の水分子の電気双極子がそろい、波動のそろったコヒーレントな光（トンネルフォトン）が発生し、脳波の発生、ホルモンなど微量伝達物質の合成が行われ、その結果としてDNAから身体全体の健康に影響が及ぶ。このように非局在情報には健康に関する情報も含まれており、個人意識へこの情報・エネルギーが伝達される「同調現象」が起き、癒しが生じる。このように基本的なスピリチュアル・ヒーリングの仮説理論として、施術者と被施術者の間で起きる現象を以下のように説明している。

まず、ヒーラーが非局在情報にコンタクトして、自分の意識情報を健康に整えます。ヒーラーはすでに非局在情報に同調しています。そして、患者さんに健康情報を含む非局在情報が流れるようにします。

ここで最も重要なのは、ヒーラーが非局在情報に同調する能力です。(中略) 質の高い多量の情報・エネルギーにアクセスできることがヒーラーの条件となります<sup>36)</sup>。

現代の脳科学には、人間の意識を細胞・分子の物質レベルで解明しようとする分子生物学的アプローチと、物質レベルでは解明できないという立場に基づくアプローチとがあるが、奥は後者の立場をとり、量子物理学を応用した量子脳理論により意識の原理を解明しようとしている。さらに物理学の観点からスピリチュアル・ヒーリングのメカニズムを解説しようとしている。

OPT 施術資格者は、岡田茂吉の揮毫による「光」の文字を挿入したロケットを首から下げることにより、OPTの生体エネルギー(光波)が霊線を通じてロケット内の「光」の文字に伝達されるとされている。現時点では「光」の文字がどのように機能しているかは科学的には解明されていないが、この「光波」とは非局在情報のことであり、ロケットを首にかけるとは、この非局在情報への同調を意味するのではないだろうか。

### 3-2 生体エネルギー放射

オッシマン<sup>19)</sup>によると、全身の皮膚にあるコラーゲン、エラスチンなどの結合組織と、細胞の中にある微小管などの細胞骨格は、細胞膜を介してつながっており、この細胞骨格も核の中の遺伝子までつながっている。この微小管はチューブリンという球形の小さなポリペプチドが螺旋状につながってできている中空の筒の構造をしており、この微小管の片側が+に、もう一方が-に荷電して+と-の両方をもつ「双極子」という状態になっている。人体の水分子も、水素原子側が+に、酸素原子側が-に荷電した小さな「双極子」になっているため、この微小管の表面の-側には水分子の水素原子側の+が引き寄せられ、水分子が微小管の表面に同じ方向に並ぶという状態が起こるようになる。このように皮膚から細胞の内側まで続くこの連続体は「生体マトリックス」と呼ばれ、内部で電子が自由に動けるような状態、つまり半導体のような性質になっていることが解説されている。つまり、この生体

マトリックスは、常に変化する超分子的連続体といわれる特殊な連続体であり、半導体のように超高速で情報を伝達する組織になっている。

さらに、生体の中では、非常に微細なエネルギーが臓器などから発せられ、このエネルギーが情報として、この生体マトリックスを通して超高速で伝わっていることが分かっている。具体的には、人体でもっとも強いエネルギーを出しているのは心臓であり、100万分の1ガウス単位と、とても微弱だが、脳は心臓の1,000分の1ほどのエネルギーを放出しているといわれている。一方、施術者の手から発せられるエネルギーの強度は1,000分の1ガウス単位で、微弱ではあるが、心臓や脳などの人体に影響を与えるには十分な強さとなっている。

このように、心臓や脳から発せられるエネルギーが強化されてエネルギー療法に使用されるわけであるが、オッシマンは、以下のような仮説を立てて、施術者から発せられるエネルギーが強化されている、と説明している。

脳からの電磁波は、生体マトリックスを通して臓器内に浸透し、細胞内の分子を同調させ振動させることにより、生体エネルギー場が強化される。そうして、手から発せられるエネルギーが強化される<sup>19)</sup>。

このように生体エネルギーがどのように発生し、強化され、放射されるかについては、未だ仮説の域を出ないが、脳、心臓、皮膚が密接に関連していることが言及されていることは注目に値する。このことと類似して、岡田茂吉は「浄霊の原理」の論文の中で、浄化力(生体エネルギー)とは「火水土の三位一体の力であって、土の力とは物質の原素で、人間の体に当る、光が体を通過する事によって土素が加わり三位一体の力となる」<sup>37)</sup>と述べ、火素と水素からなる光が、体(土素)を通過することにより浄化力になると説明している。このことは、心臓や脳からのエネルギーが生体マトリックスを経て強化され、手の皮膚から放射されるというオッシマンの仮説と類似するところがある。

### 3-3 傾聴

2-3-3で上述したように、「直接コミュニケーション」に不可欠な能力は、コミュニケーションまたは被施術者のあらゆる言語・非言語コミュニケーションのシグナルを感知することである。ここではこの感知能力を傾聴と捉え、ただ黙って相手の話を聴くというものではなく、無条件の肯定的な関心を持ち、共感的理解を深め、自己一致（思考・感情と言動の一致）を伴うものでなければならない。さらに、問題解決を目的とせず、自分の価値で判断せず、アドバイスや説教をしないことも重要である。心理カウンセラーにはこのような広義の傾聴能力が求められ、クライアントが自ら答えを見つけ出すことを信じるのがカウンセリングの成功の鍵である。このような「傾聴」が可能であるときに、相手（コミュニケーター、被施術者、クライアント）の体にも何らかの変化が生じることが、「直接コミュニケーション」の効果として上記のグリーンバーク・ジルババウム<sup>26)</sup>でも報告されている。

このような傾聴時における傾聴者の脳活動の変化について研究したのがズーメインとコジマ<sup>31)</sup>である。この研究では、能動的な聴解と受動的な聴解における脳内血中酸素化ヘモグロビンの濃度を近赤外分光法（near-infrared spectroscopy: NIRS）を用いて測定し、人間の脳の活動を分析している。神経細胞と血管を結びつける生理的なメカニズムとして、脳内で局所の神経活動が生じると、毛細血管内では、酸素化ヘモグロビン（oxyHb）から酸素分子が離れて脱酸素化ヘモグロビン（deoxyHb）に変わる脱酸素化（oxyHb → deoxyHb + O<sub>2</sub>）反応が起こる。この脱酸素化反応で生じた酸素分子は、神経細胞へ移動する。毛細血管と神経細胞の間で起こる酸素移動は、脳酸素交換（cerebral oxygen exchange: COE）反応と呼ばれている。毛細血管内の脱酸素化反応が増加すると、血液供給の需要が高まり、ヒトの場合は神経活動開始よりも4～8秒程度のタイムラグで、二次的な動静脈を含めた血流増加のピークが生じると考えられている。ズーメインとコジマによると能動的な聴解では、脳の運動前野上部において血中の脱酸素化ヘモグロビンの濃度の増加が測定され、その増加は受動的な聴解よりも顕著であることが観察された。また、左脳よりも右

脳においてその増加が顕著に観察されることが実験により判明する。

この実験結果から推察されることは、能動的聴解では脳内でより多くのエネルギーが必要となるため、エネルギー産出に必要な酸素が血中ヘモグロビンを通して供給されるということである。以上の研究結果とそこから得られる推察をもとにして、次のような仮説を立てることができるだろう。傾聴時には、脱酸素化ヘモグロビン増加に伴い、脳内活動が沈静化し $\alpha$ 波の放出が増加する。そのことにより「直接コミュニケーション」が可能になる。

## 4. 生体エネルギーの強化

以上のように、OPTは「社会的感化コミュニケーション」と「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」と「直接コミュニケーション」の複合体であり、非局在情報への同調、生体エネルギーの掌からの放射、そして傾聴能力が、OPTの施術効果を高めるために必要な要因である。本章では、これらの要因を岡田茂吉がどのように解説しているか考察する。

### 4-1 非局在情報と「霊線」

3-1では、OPTの生体エネルギー（光波）が霊線を通じてロケット内の「光」の文字に伝達されるとされていると述べたが、これは、非局在情報が霊線を通じて伝達される、と解釈できるだろう。岡田茂吉はこの霊線の意義を知ることが大事であると説いている。

霊線、という言葉は今日まであまり使われないようである。というのは、霊線というものの重要性を未だ知らなかったためで、空気より稀薄な目に見えざるものであったからである。ところが人事百般、この霊線による影響こそは軽視すべからざるものがあり、人間にあっては幸不幸の原因ともなり、大にしては歴史にまで及ぶものである。故に人間はこの霊線の意義を知らなくてはならないのである<sup>38)</sup>。

このように、光波が流れてくる霊線の意義を知り、その存在を意識することが、OPT施術の際にも重要

であり、このことを奥は、「非局在情報に同調する」<sup>32)</sup>と表現している。

#### 4-2 生体エネルギー放射と「霊衣の厚薄」

岡田茂吉は人間の想念・行為と「霊衣」、「放射能力」との関連について言及しており、自分の善意（自動的）とそれに対する他人の感謝（他動的）の「想念が光となり、霊体（霊衣・精霊）に光が増」し、逆に自分の悪意（自動的）と他人からの怨み、妬み、憎み（他動的）等の「想念が曇りとなって伝達され、霊体に曇りを増す」と解説している。ここで言う「霊体（霊衣・精霊）」とは、生体エネルギー場のことであることが察せられる。

また、施術者の霊衣の厚い者ほど施術効果が高くなることを指摘し、施術者の霊衣を厚くするためには、短期間の講習に参加し、施術の体験を多く積むことが必要である<sup>39)</sup>、と述べ、霊衣の厚薄と施術能力（放射能力）との関連について言及している。すなわち、施術能力の高低は、施術者の掌から放射されるエネルギーの強弱に比例しており、霊衣が厚いと、施術エネルギーも強化されることが示唆されている。

このように、オシユマンは、「生体エネルギー」、「生体エネルギー場」という用語で、岡田茂吉は「光波」、「霊衣」という表現を使用して、それぞれ、エネルギー治療並びにOPTの基本原理を説いている。

#### 4-3 傾聴と「利他愛、誠」

以上のように、「霊衣」を厚くするためには、「善を思い善を行う」、すなわち善徳を積む必要がある。

善徳を積むことは、利他愛の精神の実践であり、そのためには「誠」が必要であり、誠が備わった利他愛精神の実践者が「感じの良い人」である。

どうしても心からの誠が沁（し）み出るので、その人の心の持ち方次第である。つまり利他愛の精神が根本である<sup>40)</sup>。

利他愛と誠は切り離すことのできない精神であり、善徳を積み、霊性向上のために不可欠の絶対条件である。そして、利他愛と誠は日々の生活において実践することが大事であることは言うまでもないが、施術の

前後においての傾聴の際にも非常に重要な心的態度である。

「誠」に関して、岡田茂吉は、「世界も、国家も、個人も、あらゆる問題を解決する鍵は『誠』の一字である。」<sup>41)</sup>と述べ、その重要性を特別に強調している。広辞苑第4版によると、誠とは、「事実の通りであること、うそでないこと、偽り飾らない情」と定義されているが、西洋倫理学では誠 (honesty) は信頼 (authenticity) とともに、高潔 (integrity) の下位分類項目である。さらに、英語の integrity と、ドイツ語の Integrität はラテン語由来であるが、元々は「一貫性のある」という意味から発展し、「統合された」、「完全な」、「全体的な」という意味をも含む複合的な倫理学用語である。この integrity は、正確に日本語に訳すことは非常に困難であるが、これに近いものとして岡田茂吉の用いる伊都能売思想がある。

伊都能売とは一言にしていえば、偏らない主義で、中道を行く事である。小乗に非ず大乘に非ず、と云って小乗であり、大乘であるという意味である。つまり極端に走らず、矢鱈（やたら）に決めてしまわない事である。そうかといって決めるべきものはもちろん決めなくてはならないが、その判別が難しい<sup>42)</sup>

このような中道的立場をとるためには、あらゆる視点を統合した、全体的な観点から物事を観察する必要があるが、これはまさに傾聴において要求される能力である。

以上の岡田茂吉の利他愛と誠に関する論文を参考にし、integrity と伊都能売思想の類似性の考察から、OPT 施術の前後の傾聴を次のように定義することができる。

傾聴とは、利他愛と誠の心的態度をとり、あらゆる視点から相手の話を聴き、部分的ではなく全体的に相手を観察する。そして相手の話の内容に関して自己的な判断を下さない。

## 5. まとめと今後の展望

本論文では、エネルギー療法としてのOPTを統合的コミュニケーションモデルの枠組み内で考察することにより、「社会的感化コミュニケーション」、「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」、「直接コミュニケーション」の複合コミュニケーションとして捉え直すことが可能であることが判明した。また、それぞれのコミュニケーションの機能である「非局在情報への同調」、「生体エネルギー放射」、「傾聴」がOPT施術においても必須条件であり、これらの条件を能力として捉え発達させることが、施術力を高めることにつながることを確認した。さらに、この能力開発が、実は岡田茂吉の言う、施術力を高めるために必要な霊性の向上であり、これまでの「霊線」、「霊衣」、「利他愛・誠」等の宗教的用語を、科学的に翻訳することができる可能性を提示した。その際に、有用な科学分野は量子物理学、情報学、健康心理学、神経生理学、大脳生理学等である。

第1章で述べたように、霊性向上とは「統合的意識

拡張」であり、「自己意識」、「自他関係」、「自然宇宙観」、「人間と環境（不可視の世界も含む）のシステム観」を進化させる（開発する）ことである。図2では、これら4象限における「統合的意識拡張」を、四分化された円の中に整理し、それぞれの象限に重要な項目を列挙したものである。この円の外側に描かれた長方形により、これらの4象限における進化が、コミュニケーションの三側面（自己コミュニケーション、対人コミュニケーション、システム・コミュニケーション）と密接に関わっていることを明示しており、「統合的意識拡張」とは、統合コミュニケーションモデルにおけるコミュニケーション能力の開発と深く関わっており、具体的には、生体エネルギー放射強化、傾聴能力開発、非局在情報への同調能力の開発を示唆していることを理論的に説明している。

本論文では、エネルギー療法としてのOPTが複合コミュニケーション活動であることを理論的に説明し、OPT施術能力の開発に必要な霊性の向上（統合的意識拡張）が、広義のコミュニケーション能力の開発と関連していることを解説したが、これはあくまで仮説

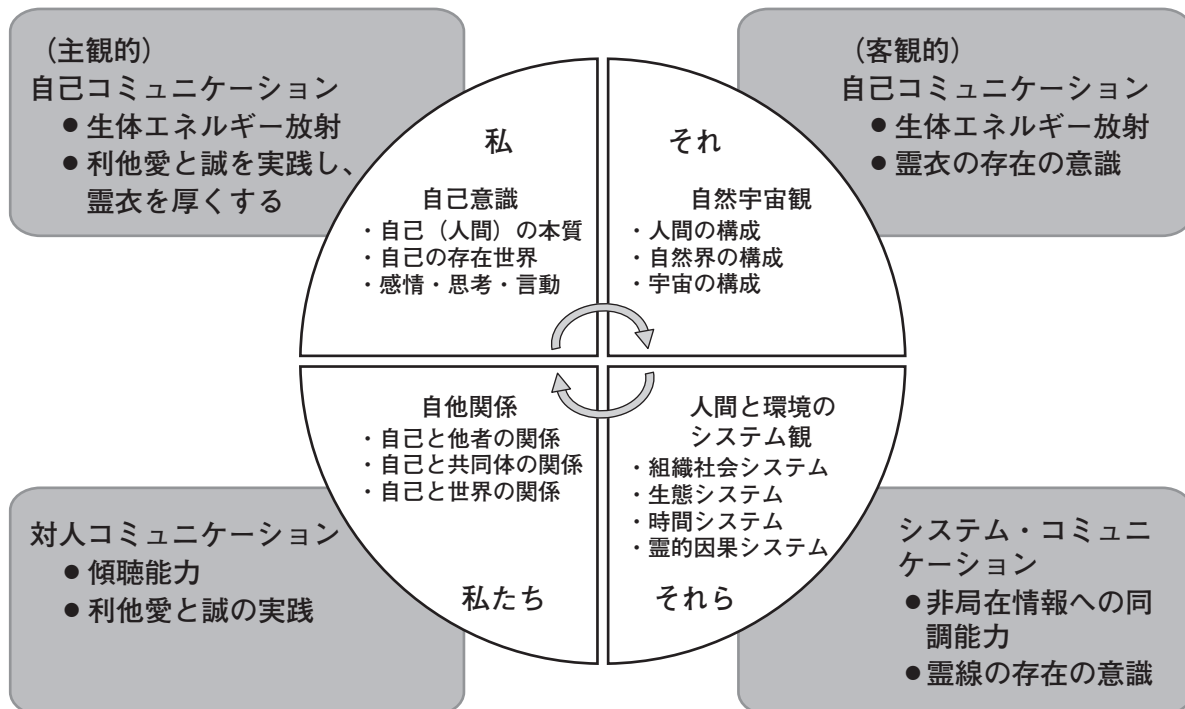


図2 統合的意識拡張とコミュニケーション

の提示であり、今後、臨床実験を通して証明されていかなければならない。また、本研究の最終目標は、OPT療法士養成を大学医学部において可能にするために、従来の養成講座の内容から宗教的表現を可能な限り取り除き、自然科学用語に翻訳することにより、より科学的普遍的なカリキュラムを作成することである。

## 謝 辞

本研究は、一般財団法人MOA健康科学センター2014年度研究助成による研究です。当センターの物質的な面だけではなく精神的な面でのご支援にも心から感謝申し上げます。また、一般財団法人MOA健康科学センターの木村友昭氏と内田誠也氏には、本研究に対して貴重なご意見を頂きました。

## [参考文献]

- 1) 鈴木清志ほか. 統合医療と生体エネルギー療法の臨床：その背景から臨床応用まで. *Biotherapy*. 21(6), 407-413. 2007
- 2) 鈴木清志, 片村宏. エネルギー療法の基礎と臨床. *日本統合医療学会誌*. 8(1), 21-28. 2015
- 3) ペーター・ホイザー, 的場主真. 人智学医学と岡田式浄化療法における霊性向上に関するウィルバーの統合理論による比較研究：医師および療法士の霊性向上と養成の課題. *MOA 健科報*. 19, 25-47. 2015
- 4) Searle, J. *Mind, language and society: Philosophy in the real world*. Basic Books. 40-41. 1998
- 5) 信原幸弘. *考える脳・考えない脳*. 講談社. 東京. 207. 2000
- 6) ケン・ウィルバー. (訳者) 松本太郎. *インテグラル・スピリチュアリティ*. 春秋社. 東京. 2008(原著：Wilber, Ken. *Integral spirituality*. Integral Books. Boston. London. 2008)
- 7) Shannon, CE., W Weaver. *The mathematical theory of communication*. University of Illinois Press. Urbana. 1949
- 8) Gabor, D. *Lectures on communication theory*. Technical Report 238. Reserach Laboratory of Electronics. MIT. Cambridge MA. 1952
- 9) Grau, C., R Ginhoux, Al Riera, et al. Conscious brain-to-brain communication in humans using non-invasive technologies. *PLoS One*. 9, e105225. 2014
- 10) 西垣通. *基礎情報学*. NTT出版. 東京. 26. 2004
- 11) 西垣通. *基礎情報学*. NTT出版. 東京. 8. 2004
- 12) 西垣通. *基礎情報学*. NTT出版. 東京. 11. 2004
- 13) Bateson, G. *Step to an ecology of mind*. The University of Chicago Press. Chicago. 279. 1972
- 14) Bradley, RT. Dialogue, information, and psychological organization. In Roberts N. (ed). *The transformative power of dialogue*. Elsevier. Amsterdam. 243-288. 2002
- 15) 土居裕和. 遺伝子多型が母子間視線コミュニケーションに与える影響の解明. *Human Development Research*. 28, 107-116. 2014
- 16) Patterson, EF. The philosophy and physics of holistic health care: Spiritual healing as a workable interpretation. *Journal of Advanced Nursing*. 27, 287-293. 1998
- 17) Bedričić, B., M Stokić, Z Milosavljević, et al. Psychophysiological correlates of nonverbal transpersonal holistic psychosomatic communication. In S Jovičić, M Subotić (eds). *Verbal Communication Quality Interdisciplinary Research*. LAAC & IEPSP. Belgrade. 1-16. 2011
- 18) Saad, M., R de Medeiros. Distant healing by the supposed vital energy: Scientific bases. *Complementary Therapies for the Contemporary Healthcare*. Chapter 11, 213-230. <http://dx.doi.org/10.5772/50155>. 2012
- 19) Oschman, J. *Energiemedizin: Konzepte und ihre wissenschaftliche Basis*. Urban & Fischer Verlag/Elsevier. 2009
- 20) 岡田茂吉. 慢心取り違い. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第9巻. 熱海. 368-369. 2002
- 21) Duane, TD., T Behrendt. Extrasensory electroencephalographic induction between identical twins. *Science*. 150, 367. 1965
- 22) Targ, R., HE Puthoff. Information transmission under

- conditions of sensory shielding. *Nature*. 251(5476), 602-607. 1974
- 23) Orme-Johnson, D., MC Dillbeck, RK Wallace, et al. Intersubject EEG coherence: Is consciousness a field? *International Journal of Neuroscience*. 16, 203-209. 1982
- 24) Grinberg-Zylberbaum, J., M Delaflor, S Arellano, et al. Human communication and the electrophysiological activity of the brain. *Subtle Energies*. 3(3), 25-43. 1987
- 25) Wallace, RK. Physiological effects of transcendental meditation. *Science*. 167, 1751-1754. 1970
- 26) Grinberg-Zylberbaum, J. The transformation of neuronal activity into conscious experience: The synergic theory. *Journal Social Biol Struct*. 4, 201-210. 1981
- 27) Koenig, HG. Religion, spirituality, and medicine: Research findings and implications for clinical practice. *South Med J*. 1194-1200. 2004
- 28) Harris, WS., M Gowda, JW Kolb, et al. A randomized, controlled trial of the effects of remote, intercessory prayer on outcomes in patients admitted to the coronary care unit. *Archives of Internal Medicine*. 159(19), 2273-2278. 1999
- 29) Kawasaki, M., Yamada Y, Ushiku Y, et al. Inter-brain synchronization during coordination of speech rhythm in human-to-human social interaction. *Nature Scientific Reports*. 3, 1-8. 2013
- 30) 奥健夫. 意識情報エネルギー医学：スピリチュアル健康学への道. エンタプライズ出版部. 東京. 2007
- 31) Remijn, G., H Kojima. Active versus passive listening to auditory streaming stimuli: A near-infrared spectroscopy study. *Journal of Biomedical Optics*. 15 (3), 037006, 1-9. 2010
- 32) 奥健夫. 意識情報エネルギー医学：スピリチュアル健康学への道. エンタプライズ出版部. 東京. 90. 2007
- 33) 奥健夫. 意識情報エネルギー医学：スピリチュアル健康学への道. エンタプライズ出版部. 東京. 93. 2007
- 34) 奥健夫. 意識情報エネルギー医学：スピリチュアル健康学への道. エンタプライズ出版部. 東京. 98. 2007
- 35) 奥健夫. 意識情報エネルギー医学：スピリチュアル健康学への道. エンタプライズ出版部. 東京. 111. 2007
- 36) 奥健夫. 意識情報エネルギー医学：スピリチュアル健康学への道. エンタプライズ出版部. 東京. 120. 2007
- 37) 岡田茂吉. 浄霊の原理. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第7巻. 熱海. 163-172. 2002
- 38) 岡田茂吉. 霊線に就て. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 87-94. 2002
- 39) 岡田茂吉. 霊波と霊衣. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第4巻. 熱海. 443-447. 2002
- 40) 岡田茂吉. 感じの良い人. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第12巻. 熱海. 273-274. 2002
- 41) 岡田茂吉. 誠. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 9. 2002
- 42) 岡田茂吉. 伊都能売の身魂. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第10巻. 熱海. 472-474. 2002

# Biofield Therapy as Compound Communication

Kazuma MATOBA<sup>1</sup>

## Abstract

The purpose of this paper is to explain that Okada Purifying Therapy (OPT) as biofield therapy is an interaction of compound communication. Further, it is pointed out that the development of spirituality (integral transformation of consciousness), which is necessary for therapeutic competence of OPT, is related with the development of communication competence in a wider scene.

This paper shows that OPT as biofield therapy can be redefined as compound communication that consists of “social-affective dialogue,” “nonverbal holistic psychosomatic communication,” and “direct communication.” Moreover, it is confirmed that functions of these communications like “synchronizing with non-local information,” “radiation of biofield energy,” and “mindful listening” are necessary conditions for OPT. These should be developed as competence so that therapeutic power can be enhanced.

## Keywords:

biofield therapy, Okada Purifying Therapy (OPT), integral theory, communication, socio-affective dialogue, nonverbal holistic psychosomatic communication, direct communication, nonlocal information, intensive listening

---

<sup>1</sup>Universität der Bundeswehr München, Fakultät für Humanwissenschaften, Werner-Heisenberg-Weg 39, D-85577 Neubiberg, Germany.  
Corresponding author: Prof. Dr. Kazuma Matoba, Ph.D. TEL: (+49)2302-1797509, E-mail: kazuma.matoba@unibw.de  
Received 25 July 2016; accepted 5 November 2016.